こんな　夢をえがいて

この詩は、小郡市内に住む小学三年生の子が書きました。

昨年春バスケットを始めた彼は、外国にルーツがある少年です。

バスケットが大好きな彼にとって、『八村塁選手の存在』は、夢であり希望です。

ぼくは、そのままベッドにねころんだ。
そして、ゆめをみた。
ぼくが、八村るい選手といっしょに、
ダンクシュートを たくさんきめていた。
目がさめて、
とっても楽しい気持ちになった。
しあいの日、
ぼくにもダンクシュートが できるかな？
と、ためした。
でも、やっぱり三年生では、
ダンクはできなかった。

大人になって、
八村るい選手みたいに
ダンクができるといいな。

よーし。
ぼくは、ぜったい
ダンクをきめるぞ。

いる　少年がいます…

スポーツをすることは、自己実現であり、スポーツを通して仲間とつながることもできます。

スポーツをする権利や自由は、人種、皮膚の色、性別、性的指向、障がいの有無など、いかなる種類の差別も受けることなく、享受されなければなりません。

スポーツの祭典である『オリンピック』が、半世紀ぶりに日本で開かれようとしています。

そんな今、　"スポーツと人権"　について考えてみませんか…？

かっこいいなあ、二人の選手

小学三年

二日前の金曜日、
ぼくの心のおく深くでは
楽しみということばが
あばれまわっていた。

それもそのはず。
ぼくは、バスケが大好きな少年。
そのぼくに、せまってくる
さい高のイベント。
それは・・・
近くの小学校にライジングの選手が
来るというのだ。

それを聞いたしゅん間、
ぼくの頭の中は、
？（はてな）だらけ。
そして、パニック。